

## 二十三夜

(鹿児島県)

むかし、二十三夜の晩は、親せきや村の人たちが集まつて月をおがみながらにぎやかに食べたり飲んだりして、お祭りをしたそうです。

あるとき、ある家で、二十三夜のお祭りをしていました。すると、ひとりの物乞いが、やぶれた着物を着てやぶれたかごを背負つてやって来ました。そして、

「これはこれは。みなさん、お祭りをなさっているのですか。わたしもいつしょにおがませてもらえませんか」といました。主人は、

「どうぞ、いつしょにおがんでください」と答えました。すると、そこにいたふたりのお客が、

「こんな物乞いなんぞ、いつしょにおがませてはいかん」と反対しました。主人は、「いやいや、物乞いだつて同じ人間だ。そういうわざに、どうかおがませてやつてくれ」といました。ふたりのお客はだまつてしましました。物乞いは喜んで、手足を洗つて上にあがりました。

やがて、二十三夜の月がのぼりました。主人はお神酒やお供えのだんごをみんなに回して、みなで月をおがみました。

祭りが終わると、物乞いは、

「こうしていつしょにお月さまをおがんで仲間になつたのです。つぎの二十三夜は、わたしの家で祭りをするので、みなさん、どうぞ来てください」といました。そして、そのときは使いの者をよこすからといって、帰つていきました。

さて、つぎの二十三夜になると、ほんとうに使いの者がやつて来ました。そこで、主人とあのときのふたりのお客が行くことにしました。三人が使いの者について行くと、高い山に着きました。こんな所にも家があるのかと思つていると、使いの者が、

「さあ、ここです」といました。そこには、たいそうりつぱな屋敷が建つていました。三人が座敷にあがると、このあいだの物乞いが出てきて、

「さあどうぞ、みなさんは、ここでゆつくりお茶を召し上がつていてください。わたしはお料理をこしらえて来ますから」といつて、台所へさがりました。

ふたりのお客は、

「あいつは、料理をこしらえるといつているが、いつたいどんな料理を作るんだ」といつて、こつそり台所に行き、障子に穴を開けてのぞいてみました。すると、たいへんなことに、物乞いが、まな板の上に赤ん坊をのせて、血をたらたら流しながら料理をしていました。ふたりはびっくりして座敷にもどり、

「ちよつと、小便をしてくる」といつて、主人ひとりを残して逃げ出しました。ところが、あまりにあわてていたので、門の所でけつまずいてたおれ、石で鼻を打つて、なんとふたりとも死んでしました。

いっぽう、物乞いは、できた料理を運んできて、主人に、

「これは、ニンジュといって、並の人間には食べることのできないめずらしい魚です。

どうぞ、たくさん召し上がるがってください」といいました。

主人は、いろいろなごちそうをいっぱいいただきました。

月がのぼり、主人が帰るときになると、物乞いは、刀を一本くれていいました。

「じつは、わたしは、二十三夜の月の神です。お帰りになるとき、門の所にふたりの男がたおれていますが、けつしてふり返つて見てはいけません。先へ行くと、天地をつなぐ大きな柱が三本立っています。これは、シチという妖怪です。そのシチの風上にまわつて、まんなかのシチをこの刀で切りなさい」

主人は、いとまごいをして帰つていきました。門の所まで来ると、ふたりのお客がたおれていましたが、見向きもせずに歩いていきました。すると、黒と白と黄色の三本のシチが立っていました。主人は、風上にまわつて、まんなかの黄色のシチを刀でハシツと切りました。そのとたん、黄金が、ガラガラと、主人をうめるくらいたくさん落ちてきました。

主人は黄金を持ってかえり、大金持ちになつたということです。

おしまい

原話..『昔話研究7』「喜界島昔話」三元社  
再話..村上郁